

2021年度 神戸市外国語大学 特別選抜（帰国子女・外国人留学生） 入学試験問題【小論文】

次の文章を読み、設問に答えなさい。

「自由に生きる」って、どういうこと？

これから社会に出ていこうとする学生たちを対象とした講演会で、学生にこんな質問をしたことがあります。

たとえば、広い体育館があって「ここで何をしてもいいよ」と言われたら、どうしますか？「どこでもいいから、寝てください」と言われたとしても、たぶん、ほとんどの人が体育館のど真ん中で寝たいとは思わないはず。

やっぱり、近くに壁があるところに行こうとするんじゃないだろうか。自分の周りに防御してくれるもの、守ってくれるものが欲しい。自分がひとりぼっちだと感じないですむような囲いを求めてしまう。

「自由に生きる」というのは、その囲いを出て、まっさらで何の囲いもない場所に、ぽつんとひとり、立つことなのだと思います。

ものすごい孤独感や心許^{こころもと}なさ、自分自身の頼りなさにさらされて、身がすくむような思いをするかもしれない。それを感じないですむように、人は群れで生きるのでしょうか。

囲いの中において、自分の所属するコミュニティの価値観に合わせていれば、安心だし、自分で何かを判断する必要がないのですから、ラクです。「群衆」というのは、つまり人が身を守るための囲いでもあるんです。

そこが自分に合わない場所だと、囲いに合わせることはかなり息苦しい。反対にじっくりとくるところなら、案外苦にならなかつたりもする。いずれにせよ、人はその場に適応するために、周りの価値観と自分の価値観のせめぎ合いを、どうにかやりくりしながら生きています。

どこにいても、マイペースに振る舞える人もいれば、みんなといると自分を出せないという人もいる。自分ではうまく振る舞っているつもりでも、実際は体を無理な形にして縮こまらせている人もいるはずです。

旅に出て、自分のことを誰も知らない場所に身を置くと、そのことがよく実感できます。それまでの経験や価値観が通用するかどうかもわからない場所で、人は自分を試される。ましてそれがひとり旅なら、何かをするたびに自分で判断しなければならぬわけで、まっさらな場所で「お前は何者なのか」と問われているような気持ちになるはず。そうやって自分で考え、自分で感じ、自分の手と足を使って学んでいくことを「経験」と言うのだと思います。囲いの外に出なければ、血肉となるような経験は得られないでしょう。

質問を変えてみましょう。もし自分が完全な「流浪の民」状態で、帰る場所も国籍もなかったとしたら、それでも平気で生きていけますか？

講演会では、圧倒的に「ノー」という答えが多かった。やはり、帰属する場所がないというのは、かなり心許ないのだと思います。

イスラエル建国前のユダヤ人とか、難民の人たちのように、実質的に国籍がない、帰る場所がないという人もいれば、私のように早いうちから海外に行ってしまったせいで、日本人であるにもかかわらず、国籍とシンクロしない感性が生まれてしまう場合もある。

私は今、イタリアに住んでいるのですが、これまで中東のシリア、エジプト、ポルトガル、アメリカ、いろんなところを転々としながら暮らしてきました。

行く先々で受け入れがたい差異を感じることもあれば、その場所に適応するために受け入れざるを得ないこともあって、いろんな土地でいろんな文化や価値観に揉まれるうちに、自分がどこかに所属しているという感覚がどんどんあいまいになって薄れていき、いつの間にか囲いの外に、身ひとつで出ていたというわけです。

2021 年度 神戸市外国語大学
特別選抜（帰国子女・外国人留学生） 入学試験問題【小論文】

設問1 下線部「自分ではうまく振る舞っているつもりでも、実際は体を無理な形にして縮こまらせている」というのは、例えばどのような状況だと思いますか。自分の体験を例に挙げて 300 字程度で論じなさい。

設問2 筆者の考える「自由に生きる」ということについて、あなた自身の「経験」を交えながら、あなたの考えを 500 字程度で述べなさい。